

道風

道風記念館だより

第66号

発行日
令和五年三月三十一日

編集・発行

春日井市道風記念館
春日井市松河戸町五―九―三
電話(〇五六八)八二―六一〇

収蔵品紹介 宮島詠士書幅

一幅・昭和五年

宮島詠士(一八六七―一九四三)は、米沢藩猪苗代片町に生まれました。名は吉美、通称は大八号は昴斎、別号に詠帰山人、詠而帰廬主人があります。米沢藩士で後に貴族院議員となった宮島誠一郎を父にもち、明治一〇年(一八七七)父の言に従い勝海舟の門に入りました。一三年、清国公使の随員であった黄遵憲に中国語を学び、一四年興亜学校に入學しました。翌年、東京外国語学校に転校しましたが、一八年には廃校されることとなりました。廃校後の処遇について、英語、独語、仏語の三学科は大学予備門に吸収される一方、露語、支那語、朝鮮語の三学科はされないことに激

怒。一七年に退学しました。中国の文物を尊重していた詠士にとってとうてい受け入れられないことだったのです。この作品の大意は、忠義と孝行を宝とし、経書と史書を自身の根源とするという意味で、作者の思想がよくあらわれています。

明治二〇年、かねてからの願望であった留学のため横浜港を発ち、張裕釗(字は廉卿、一八二三―九四)の門を叩きました。裕釗は清朝末期を代表する碑学派の書家であり、文学者としても知られていました。裕釗のそばで経史や文学を学び、書は師の書法を基礎として自己の書法を形成していきましました。張猛龍碑(図1)に大きく影響を受け、にじみを伴った独特の書が残されています。本品は「庚午」の年紀から昭和五年(一九三〇)数年六四歳の作と知られます。この特徴的なにじみは書法が筆力と墨量とに大きくかわるところから発しています。



一四六七×三二八mm

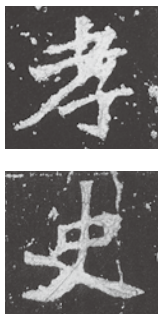


図1 張猛龍碑「孝」「史」

「筆力紙背に透る」という形容があり、書道を入木道ということがあります。雨宿りの際、水が屋根裏の板を貫きにじみ出てくるのを見て、張裕釗が常に溢れるような墨量で書し、中鋒を重んじていた理由を悟りました。その書法の上に「孝」の第三画の起筆部にみられるような表現を加え、独自の書確立していったのです。

明治二七年、張裕釗が没し、西安から帰国後は『論語』先進篇の「詠而帰」の語を典拠として字を詠士とし、中国語などを教える私塾を詠帰舎と名付けて開設しました。のちにこの私塾を善隣書院と改称して移転拡張し、中国関係の外交官や商社マン育成の場となりました。

書を東アジアの学問や教養の中核と捉え、書家という枠には収まらない宮島詠士。東京帝国大学文学部講師に就任するなど、中国語教育を中心に人材の育成に努め、日中の友好を深める土壌をつくりました。弟子の上條信山は次のように記しています。「先生はあくまでも学者であり、思想家であり、真の国士であつた。」

後京極良経

古谷 稔

後京極良経（一一六九—一二〇六）は、姓藤原氏、九条良経とも。父は九条兼実、母は藤原季行の女。幼名は乙童、乙若、元服（昔の男子の成人式）後に良経と名乗り、中御門摂政また後京極殿と称された。

文治四年（一一八八）、同母兄の良通が二十二歳で頓死した。父兼実はこの良通の才気あふれる人物に嘱望していたが、その死後は、九条家の嫡男として良経に期待を寄せた。

叔父・慈円の著した史書『愚管抄』では、兄良通は天下周知の傑出した才人であり、弟の良経もまた詩歌・能書ともに昔に恥じるものでなく、政理（政治を執り行うこと）・公事は父祖を継承していると伝える。

良経は、治承三年（一一七九）元服して従五位上、文治元年（一一八五）に従三位に叙せられ、その後、権中納言・権大納言に進み、左近衛大将を兼ね、建久六年（一一九五）に内大臣となる。その翌年十一月、兼実が政変により失脚すると、それは良経にも波及し、以後籠居の身となり、同九年には大将を止められた。三年後には勅勘が解かれて左大臣に任ぜられ、建仁二年（一一二〇）、兼実の失脚を演出した源通親の死を契機に氏長者・摂政となり、元久元年（一一二四）には従一位・太政大臣となるが、翌年大臣および氏長者を辞した。その翌年、建永元年（一一二〇六）三月七日の早朝、良経は自邸で就寝中に急死、三十八歳であった。

。死因は刺客に襲撃されたとする説もあるが、良経が幼少より病弱な一面を有し、今日では病死とする見方が通説となっている。

良経は文学面での活躍が特筆される。藤原定家撰の『百人一首』では、「きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねむ」（きりぎりすの鳴く霜降る夜の寒い（狭筵）に、わが衣の袖を片敷いて一人寂しく寝ることだろうなあ）の一首が有名。恋の歌を思わせるこの一首は、『新古今和歌集』では巻五秋下に収録する。

後鳥羽院は宮廷和歌の復興は王朝盛時への回帰につながるものと希求し、『新古今和歌集』の勅撰を企図した。建仁元年（一一二〇）に和歌所が設置されると、良経は源通親・慈円・藤原定家とともに寄人（和歌の選定のことを司る。召人とも）に選ばれた。『新古今和歌集』の良経の入集歌は、西行・慈円に次ぐ第三位で七十九首を計上する。ここで、良経の書を眺めてみよう。

- ①後京極良経筆詩懐紙 一幅
- （三井記念美術館蔵）→図1

- ②後京極良経筆書状 一幅
- （東京都国立博物館蔵・重要文化財）→図2

- ③後京極良経筆書状 一幅
- （京都国立博物館蔵・重要文化財）

- ④後京極良経筆般若経理趣品 一卷
- （仁和寺蔵・重要文化財）→図3

右の四点はすべて自筆本として容認されるもの。まず、①に注目したい。本紙寸法は縦三二・七センチ、横五〇・七センチ。その書は筆力を内に秘めた見事な和様で一篇の漢詩が墨書されており、「左近衛大将良経」の署名が付される。本紙には本文に対して抹消、加筆修正が施され、これによ

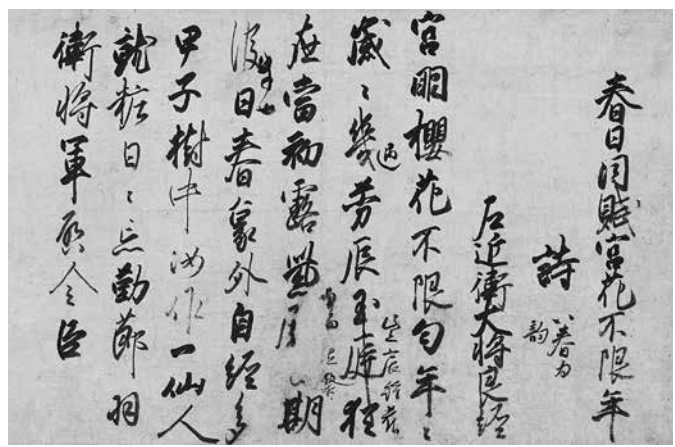


図1 後京極良経筆詩懐紙 (三井記念美術館蔵)

て本詩懐紙は草稿本と思われる。

懐紙の題に、「宮花不限年」とあり、七言律詩によって宮中の桜を詠じた宮廷賛歌ともいえる。書風から見て、祖父・藤原忠通自筆の書状（東京都国立博物館蔵）や、書状案（京都国立博物館蔵）と比較して明らかに書流の継承が認められ、本懐紙はさらに丈長で整った新鮮な書風を確立する。書道史では後京極流の名で呼ばれ、尊円親王の書論『入木抄』（日本思想大系23『古代中世芸術論』）では、法性寺関白出現之後、天下皆一向此様に成て、後白川院以来時分如此。剩、後京極撰政相統之間、弥此風盛也。

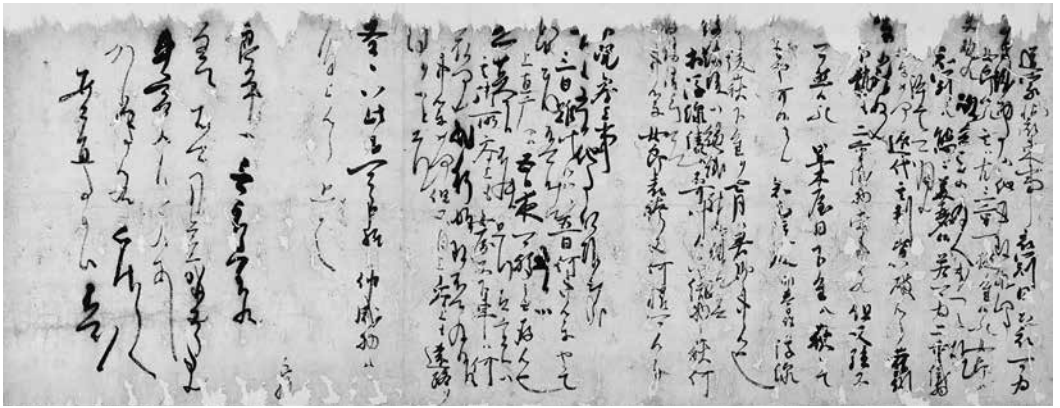


図2 後京極良経筆書状
(東京国立博物館蔵)

図3 後京極良経筆般若経理趣品(部分)
(仁和寺蔵・小松茂美編『日本書蹟大鑑』
講談社より転載)



きを過ぎしている。時に良経は二十三歳。この日の前日、後鳥羽天皇の中宮任子(兼実の女。建久元年正月に入内)はすでに内密に観桜を遂げていた。そこには、兼実・良経ともども、道長・頼通らが築いた撰閑家による外戚政治の復活を期し、栄耀栄華の再現を夢想しているようにも推察される。しかしながら、詩歌会に向けて懐紙の草稿本は残ったものの、実際に清書本が提出されるはずの詩歌会は開催されずじまいとなった。その事情の詳細は拙稿(『MUSEUM』四九八号)を参照されたい。

良経の背後には絶えず父兼実の存在が浮き彫りにされ、嫡男に対する熱い眼差しが窺える。

と、良経書の流
行ぶりを称えて
いる。
本文の行間に
書き入れがあり、
その筆致から推
して父・兼実の
添削と考えられ
る。それを物語
るものが、その
日記『玉葉』の
建久二年(一一
九一)三月十四
日条に示される。
同日の明け方、
兼実が宮中にお
いて女房らとと
もに良経を伴っ
て観桜のひとと

他の一例として、②の書状に目を転ずると、冒頭に「道家装束事云々」とある。これは良経の子・道家の元服に関するもの。その儀式にあたり、当日に着用すべき装束や典故について良経が父兼実に問い合わせたのが、この書状である。長い文面で判読困難な部分もあるが、本状では良経自身の書状に対して、返信として、兼実がじかに書状の行間に懇切に回答を記している。このように、受理した書状の紙面に返事を書き込んだものを勘返状と呼んでいる。

それは③の書状でも同様の書式が採られている。良経が院の御所における藤原俊成の九十賀宴に関する故実を問いただした書信に対して、本状では兼実自身の返報が末尾に五行に書かれている。

④は巻末に良経自身が建仁二年(一一〇二)正月十六日の奥書を付した写経で、前年の十二月九日に兼実の妻(良経の母)が没しており、その母の菩提を弔うために筆を執ったもの。「ひらみたる」字形と粘りある筆致で構成されたその書風は、法性寺流の一特徴と見なされ、忠通の書流を彷彿とさせる。

懐紙・書状・写経ではそれぞれ書写の目的を異にし、同一人物でありながら微妙に書風に変化を見せるが、いずれも鎌倉初期の書道史上の典型を垣間見るようだ。

なお、江戸末期の古筆了仲編『新撰古筆名葉集』には、「後京極良経公」の項目において、古筆切として興福寺縁起を書写した「興福寺切」以下、二十一点が掲げられ、すべてが伝称とはいえず、近世における良経書の愛好ぶりが捉えられよう。

(東京国立博物館名譽館員 ふるやみのる)

令和5年度 スケジュール (前期)

3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
館藏品展「白と黒のコントラスト」 2月1日～4月23日 ・余白の白と墨の黒が互いに引き立て合った作品を展示。		館藏品展「書の魅力」 4月26日～7月9日 ・書の様々な魅力を紹介し、鑑賞方法を提案する展覧会。			企画展「おののとうふう」 7月14日～9月18日 ・子どもにもわかりやすく小野道風を紹介。 ・ワークショップを実施。		特別展「人と書」 9月23日～10月29日 ・平安時代から現代までの書の名品を展示。 ・講演会を実施。	
展覧会 ■■■■■ 講座 ■■■■■	臨書講座 5月～7月		「書にふれる、はじめての講座」 6月～7月					
常設展示 小野道風をはじめとする平安時代の書について								

※内容・会期等を変更することがあります。

展覧会案内

館藏品展「書の魅力」

「書の魅力」展では、道風記念館が所蔵する近現代書作品のなかで、選りすぐりの作品を展示します。書は、紙に筆で文字を書くという、シンプルな活動によって生まれる芸術ですが、その表現は実に多彩です。書表現の多彩な魅力を知っていただきたいと思います。

この展覧会では、その作品の魅力をより感じられるように、いくつかの鑑賞の視点を提示しながら書作品をご紹介します。まず視点を絞って鑑賞してみてください。作品に愛着が湧いてきます。そして次にその絞った視点を取り払って自由にご鑑賞いただくと、ひとつの作品がもつ様々な魅力が感じられ、きっと、「書は面白い。」と思っただけのことでしょう。

- ◆ 会 期 令和5年4月26日(水)～7月9日(日)
- ◆ 観覧料 一般 100円、高校・大学生 50円、中学生以下 無料
- ◆ 休館日 月曜日(祝日の場合は開館し、翌日休館)
- ◆ 展示品解説 5月13日(土)、6月11日(日)
 ①10:30～11:00 ②14:00～14:30

